

学校経営のポイント

“プロセス重視のゲーム観”の育成

若井 彌一

春の選抜高校野球が、茨城の常総学院高校と宮城の仙台育英高校の決勝戦で幕を閉じた。結果は、大方の読者をご存知のとおり、常総学院が7対6で仙台育英の追撃を振り切った。7対6という数字（スコア）からも推察されるように、実におもしろい試合であった。

試合には、原則として勝ち負けが伴う。「名監督」の1人と評されている常総学院の木内監督が、試合後のインタビューで「この一戦だけは勝敗にこだわった」旨の信条を語っておられたが、決勝戦であるだけに、両監督とも同じ思いであったであろう。

さて、今回述べたいことは、これから本格的なスポーツ・シーズンを迎えるに際して、児童・生徒に、試合のプロセスを楽しむ観戦態度、さらにはプロセスを研究する観戦態度（以下、「プロセス重視のゲーム観」という）を育成することの積極的意義についてである。

子どもに知的充実感を感じさせる

積極的意義の第1は、児童・生徒が漫然と時を過ごすのではなく、一種の知的充実感を感じながら過ごすことができるようになることである。「知的充実感」というと大げさに聞こえるかもしれないが、けっしてオーバーな表現ではないと思う。

知的充実感を味わった児童・生徒は、翌日他の児童・生徒あるいは教師と観戦したゲームについて話し合う際に、自分なりの（高度かどうかは別として）説明ができることに、少なからず精神的満足を覚えるであろう。

積極的意義の第2は、試合のプロセスを追う生活態度を身につけることにより、それが県大会レベルとか全国大会レベルであるならば、「実力」に関係なく、いわゆる「運」とか「ツキ」があるだけで勝

利することはほとんどあり得ず、結局、ふだんの練習の成果が問われるのだということを、実感をともななって理解できるようになるということである。地道な努力なしに栄冠は掴めないことを知り、日常的な努力を嫌わない生活態度を身につけていく可能性が大きくなる

「努力しても報われない」こともある

積極的意義の第3は、第2とは逆説的に聞こえるかもしれないが、どんなに努力をしても、競争相手がある場合には、お互いのレベルが高度になればなるほど、報われない（勝利者になれない）ことがある、ということを知り、それが生活態度に生かされる可能性が大きいということである。

「負けて、さわやか」という言葉がある。全力を出しきって、それでも勝つことができない。自分よりも、自分たちよりも強い、鍛え抜かれた人たちがいることを実感する。この実感は、相手方への尊敬の念を生じさせ、そういう存在になるために、さらに工夫し、努力しようという気力を生む。

今回、惜しくも優勝を逃した仙台育英高校の選手諸君の心境は、察するにこのようなものであろう。夏の捲土重来を期待したい。その意気込みこそ、人生哲学の要であり、「生きる力」の実例でもある。

（わかい・やいち = 上越教育大学教授）

5月特大号 月刊**教職研修** 4月19日発売
特別付録「ミレニアムCD」添付

「21世紀への提言」「教育行政資料(中教審答申等)」「全国特色ある学校一覧」「教育関連URL一覧」「教育100年史」「教職研修誌創刊号からの目次一覧」など学校経営に役立つ資料が多数収録されています。

本紙はホームページでも閲覧できます

13年度夏季教育管理職研修会7/29・30・31開催!

新刊研修図書 3月27日 第1巻発売! お申込みは書店または直接小社へ 教育開発研究所 刊
『学校講話の話し方・作り方』(全4巻) 各巻A5判・平均200頁・定価2,310円(税込)

第1巻『**児童・生徒への学校講話**』【編集】安齋省一(前全日中会長)

研修誌・図書の直接注文は、無料FAX 0120-462-488をご利用ください(24時間受付・即日発送)